
日本海造型会議の活動に関する考察——戦後金沢の前衛芸術運動をふまえて

笠間亜理沙(金沢美術工芸大学)

戦後、1960年代前後をピークとして、日本各地で前衛芸術運動が活発化し多様な前衛グループが誕生した。こうした前衛グループを代表するものとしては、具体美術協会やネオ・ダダイズム・オルガナイザーズが挙げられる。

これらの著名な前衛グループに限定せず、全国を視野に収め、初めて各地の前衛グループを広く紹介したのは、1997年に水戸芸術館現代美術センターで開催された展覧会「日本の夏 1960-64 こうなったらやけくそだ!」である。2000年代以降になると、各地の周知されていない前衛グループに焦点を当てた展覧会がたびたび開催されてきた。

しかしながら、全国的にこうした展覧会の機運が高まる一方で、金沢における戦後前衛芸術運動に関する研究は、いまだ十分に進んでいるとは言えない。そこで本発表は、金沢で発足した前衛芸術グループ「日本海造型会議」を中心に、金沢の戦後前衛芸術運動の特色を明らかにする。

日本海造型会議は「集団〈青〉」、「グループ〈赫〉」、「北陸現代作家集団」を前史として、1976年に発足した。当時、金沢では現代美術に対する風当たりが強く、アーティストたちは、自由に表現を追求できる場を求めて同グループを結成した。グループはその後、2008年までの32年間にわたり、月に一度の定例会を開催しながら活動を展開した。特筆すべきは、日本海造型展や野外展を開催したほか、石川県立美術館が新設される際に要望書を提出したことである。

こうした活動の分析から導き出される、日本海造型会議の特徴は次の二点である。

一点は、前衛芸術運動が全国的に収束し始めた1970年代後半という時期に結成され、長期間にわたって継続的に活動した点である。前衛芸術運動はピークとなった1960年代の動向に関してよく言及されるが、それ以降に関しては比較的語られることが少ない。

もう一点は、芸術文化行政に連動して運動を展開していった点である。例えば、メンバーが行政より委託された金沢21世紀美術館の開館イベントである、1998年の「25人のインスタレーション」展の開催が挙げられる。この展覧会は、同館の建設予定地に建っていた学校の校舎を用いたものであり、市民が現代美術への理解を深めることを目的に開催された。日本海造型会議の主要メンバーの大場吉美、斉藤久子を中心に選出された25人の作家が、インスタレーションを展示し、2週間で約5千人が来場した。つまり一連の活動は、金沢における現代美術の受容と機運の醸成につながったのである。

以上より、本発表では日本海造型会議を中心に、金沢における戦後前衛芸術運動の独自性とは、地域に根ざす形で定着していきながら、芸術文化行政に連動して運動を展開していった点にあると主張する。こうした本発表の考察によって、全国的には収束した戦後前衛芸術運動の「その後」に関する新しい知見を提示することが可能になる。